



遺族の朴源奎氏 (68 才) が県庁で「日本は海の深い所にいる父親を半世紀以上放置している。私が生きていた間に追悼碑を建立したい」と声を震わせ訴えた

事故から 64 周年を迎える今年も韓国から金会長をはじめ 8 名のご遺族を招いた。2 月 3 日には 4 日の追悼式を前に約 20 名が県庁を訪れ、追悼碑の早期建立に協力を求めた。遺族会の金会長は「先祖が安らかに眠れるよう一日も早く追悼碑が建てられるよう願う」と述べ、県代表は「遺族の無念な思いは痛いほど分かり、重く受け止めている。県民に理解が広がるよう協力したい」と答え、日本政府が昨年実施した朝鮮半島出身民間徴用者の遺骨調査に県も協力したことなどを報告した。その後宇部市役所にも訪問し協力を訴えた。

4 日寒さ厳しい中、150 名もの支援者が集い、ピーヤが見える海岸で例年同様追悼式が行われた。会を代表して澄田亀三郎氏は「水没事故から実に 64 年、いまだに私たちとりわけご遺族の方々が切望してやまない「碑」の建立ができていません。ご遺族の方々をお迎えするたびに、私たちの不甲斐なさ、日本人の戦争責任をとろうとしない姿勢に憤りを覚えています。しかし、私たちはあきらめません。」と、遅々として進まない碑の建立に力を貸してくれるよう訴えた。今年は韓国政府の「真相究明委員会」よりメッセージも届けられた。(掲載)

5 日は裴東録さんの案内で関門鉄道トンネルの殉職者の碑 (4 名の朝鮮人名を記載) を見学し、下関港で別れを惜しみながらご遺族を見送った。

その後、韓国政府は徴用遺族に最高 240 万円の慰労金支給を決定し、また長生炭鉱の生存者の確認の報 (掲載) もあり、長生炭鉱の絵本製作に向けて動きが始まった。私たちの地道な活動は決して無駄ではなく、もっと大きな流れにつながっていくことを確信して頑張っていきたい。

刻む会たより

No 3 2

2006.7.1

長生炭鉱の「水非常」を歴史に刻む会 (代表 山口武信)
 事務局 宇部市常盤町 1 の 1 の 9 宇部緑橋教会内 TEL 0836 (21) 8003

冷たい風が襟元に吹き込みます
この渚、砂の上を歩いています
彼方のピーヤが、押し寄せる波にあえぎながら
寂しく立っています
ピーヤの近くでしょうか？もっと遠いところでしょう
か？
もしかしたら渚まで流されてきたのでしょうか？
アボジ(父)どこにいらっしゃるのでしょうか？
白砂の上、うねる波の上に
アボジの姿を描いてみます
見たこともないアボジを描くことすらできません
あ… どんな姿だったのでしょうか
りりしい力持ちを想像してみたり、
洋服を着た紳士、
韓服を着たアボジを想像しながらも
最後にはうつむいてしまいました
この地にいた、アボジの姿は石炭で黒ずんだ
ボロボロの作業着を身にまとい、
現場監督の監視の中で、不安げな坑夫の姿
だったでしょう
あ… 一度で良いからアボジの顔をこの目で
見たい
真っ黒になった顔でもいいから、
アボジの顔を見たい
あいたい アボジ
今日もまた、アボジのぬくもりを感じるため、
この地を訪れました
ここに集まった多くの人々が、みえますか？
この方たちは、心からアボジのことを考え、ともに
懐かしむ人々ですよ
'歴史を刻む会'の会員の皆さん、
意を同じくする宇部市民の皆さん、そして彼方は
るばる仕事を休んでまで、追悼式に参加して下

さった多くの方々が私たちと一緒に集まっていま
す。
アボジが逝かれて、半世紀
追悼式が行なわれて10余年
永い永い年月、無駄に流れたのではないでしょ
うか、あまりにももどかしい気持ちでいっぱいです
追悼式につねに参加され、ともに痛みを分かち
合った兄弟たちが寄る年波に勝てず、ひとりず
つこの世を去っていきます
前遺族会長 キム ヨンヒョン氏、日本で私たち
を手伝って下さった リウオンジュ氏。
初めて日本で追悼式をした時、参加された キ
ム ドンナム氏を始め、多くの兄弟たちが アボジ
のそばに旅立たれました
あんなにも見たかったアボジ達に
天国で会えるよう願います
皆さん!
今日のこの場をともにしている皆さん!
私たちに力を下さい
私たちを支援して下さい
永い永い悲しみの年月を歩き、たちあがる
励ましを下さい
潮風の中、冷たい海の底で今日も目を閉じら
れない魂がやすらかに眠れるよう
手をさしのべて下さい
アボジ!
アボジの休息の場を作るのは
私たちに残された使命でしょう。
ここに集まられた皆さんとともに、
ひとつずつやり遂げます
見守り、力を下さい
アボジ、いつかその日が来ることを願い
安らかにお眠り下さい

長生炭鉱水没自己六四周年追悼の辞

大韓民国 日帝強占下強制動員被害者
真相糾明委員会 委員長 全 基 浩

日本植民地支配下の1942年2月3日、
山口県宇部市長生炭鉱で、強制連行され
た130余名の朝鮮人労働者が海底に生
き埋めになる惨事が起きました。

犠牲者たちの望郷の念と深い恨が何一
つ叶えられないまま、事故が起きて64周
年目の追悼式が、事故現場で催されます
が、はたして彼らの靈魂をどこまで慰めら
れるかと、悲しい思いで一杯です。

冷たい海底炭鉱で、一体の遺骨も発掘
できないまま、遺族だけで追悼式を催す
ことに対し、日帝強占下強制動員被害者
真相糾明委員会 委員長として、心苦しい気
持ちを禁じえません。

長生炭鉱は一時、日本でも指折りの海
底炭鉱として、海岸から10余kmまで坑
道が掘られていました。

水没事故当時、ここで犠牲になった18
0余名の中で朝鮮人が130余名に達し、
大部分の犠牲者が私たちの祖先です。

海底に位置し海水の進入で事故が頻発
していました。この炭鉱で危険が常に伴う
鉱内作業は強制動員された朝鮮人たちに
課せられたことは十分に推測できます。

当委員会も昨年4月から長生炭鉱水没
事故に対する真相調査に着手しました。

それは過去、日帝の非人間的行為を早
急に調査し、公開し誤った歴史を正し、再
びこのような惨事を再発しないようにす
るためです。

当委員会は遺族と共に、長生炭鉱犠牲
者に対する追悼事業支援に最善を尽くす
方針です。

最後にお忙しい中にもかかわらず追悼
式のため、「尽力下さった」長生炭鉱の口
水非常口を歴史に刻む会「山口県朝鮮人
強制連行真相調査団」をはじめとする、関
連団体の皆様にお礼を申し上げますと
もに、遺族会の皆様に深い哀悼の意を表
します。

2006 年度招聘カンパ会計報告

2006年7月

収 入		支 出	
遺族招聘カンパ	611,731	遺族招聘経費	280,780
(155名 12団体)		チェーサ及び交流会計費	60,342
追悼式現地カンパ	14,200	マイクロバス関連経費	96,450
		交流懇親会補助	23,600
		諸雑費	68,200
合 計	625,931	合 計	529,372

○ 収支決算 625,931 - 529,372 = 96,559

【韓国発】 長生炭鉱強制徴用の韓国人生存者を確認

「死ぬ前に厚かましい日本からまともな謝罪を受けることは難しそうなので」
～強制徴用者の金さん、体験談を書く[4/22]

▲生き地獄のようだった水没現場

1922年に慶尚北道浦項市杞溪面(キョンサン プクド・ポハンシ・キゲミョン)で生まれた金さんは、1941年7月に突然入ってきた日本警察によって理由も知らないまま、長生炭鉱に連れて行かれた。

水没事故が発生した1942年2月3日の午前9時半頃、金さんは前日の午後5時から続いた16時間の採炭作業を終えて、宿所に帰る途中だった。「急に坑口(炭鉱の入口)近くで『水非常』と言う声が聞こえ、後ろを振り向くと、海の上に突き出ている換気口から黒い煙と水柱が湧いたんです」大人の腰の高さに過ぎない狭い坑道の支え木が水圧を耐えることができずに崩れ、海水があつという間に坑道全体を満たした。炭鉱側は隣近の村が浸水される危険があるとし、炭鉱の入口を閉じ込め、当時炭鉱の中にあつた強制徴用者たちは一人も抜け出すことができなかつた。日本側は、この事故で亡くなった炭鉱労働者は、韓国人徴用者133人を含め合わせて183人だとの報告を行った。しかし金さんは、いつも200人以上が採炭作業をしていたので、犠牲者の数は200人を超えるだろうと見ている。炭鉱側は、事故再発の危険が高いという理由で遺体の発掘も行わずに炭鉱を閉鎖した。

▲終わらない悪夢

金さんは水没事故が発生してから3日後に、監視が疎かになった。すきを利用して炭鉱を脱出した。当時、長生炭鉱は強制徴用者たちが泊った宿所の あちらこちらに監視塔を建てて厳格に見張った。炭鉱側は、脱出した強制徴用者を捕まえた住民たちに米一俵ずつを与えていた。つかまった強制徴用者のうち、その多くは酷い暴行を受けて死亡した。

また、多くの韓国人徴用者が採炭作業の途中、天井からの落石や伝染病で死亡した。金さんもコレラにかかって意識を失ったことがある。日本人の医師は金さんを 火葬場に連れて行くように指示したが、一緒に徴用されていた故郷の先輩が、辛うじて助けてくれた。

金さんは兵庫県の韓国人の家に隠れて過ごしていたが、1945年に見つかって軍隊に連れて行かされた。しかし、まもなく光復(日本からの独立)を迎えて、その年の10月に韓国に帰って来ることができた。強制徴用当時に暴行にあい、右腕をほとんど使うことができない金さんは、6・25(韓国戦争)戦争の時には聴力までも失った負傷軍人でもある。

夫人とつらい生活を送っている金さんは、数年前からハングルを学んで自分が経験したことをノートに書いている。ノートに自らの体験を書き始めた理由を金さんは、「死ぬ前に、厚かましい日本からまともな謝罪を受けることは難しそうなので、胸の中の蟻りを解消するためには、何か残さなくてはならない。」と述べた。

(ソース:東亜日報 4月22日)